

イサザの採卵技術開発（産卵抑制および促進）

上野 世司

1. 目的

イサザの種苗生産技術開発にあたり、産卵期の親魚の飼育水温の調整により、産卵期間をコントロールすることを試みた。

2. 方法

琵琶湖水を注水した水槽に、産卵基質として、板レンガを水槽底面との間に隙間ができるように設置し、イサザ成魚を各 30 尾収容した。低水温設定は平均 6.3（5.1~8.4）とし、5/11 から 11 以上（11.0~15.4、平均 12.6）に変更した。高水温設定は平均 15.0（14.2~15.5、5/10 まで）とした。対照は水温調整なしの湖水温（8.9~19.3、後半ほど上昇していく傾向）とした。2 日に 1 回の頻度で産卵床数を確認した。実験期間は 4/11 ~ 5/26 とした。

3. 結果

対照区では、4/16 から産卵がみられ、5/23 まで産卵床が確認された。産卵床数は、前半より後半は少なくなった。

平均 6.3 の低水温区では産卵は確認されず、水温を 11.0 以上に上昇させた 5/11 から産卵が確認されるようになり、実験終了（5/25）まで産卵床が確認された。産卵床数は、同時期の対照区よりも多かった。

高水温区は、産卵の早期化を期待しての設定であったが、対照区の産卵開始が早く、産卵開始時期の差はほとんどなかった（図 1）。

4. 成果

イサザの種苗生産技術開発実験を遂行する上で、産卵抑制による採卵可能期間の長期化が可能となるものと期待される。

本報告は農林水産技術会議の委託事業「平成 23 年度地球温暖化が水産分野に与える影響評価と適応技術の開発」の成果の一部である。

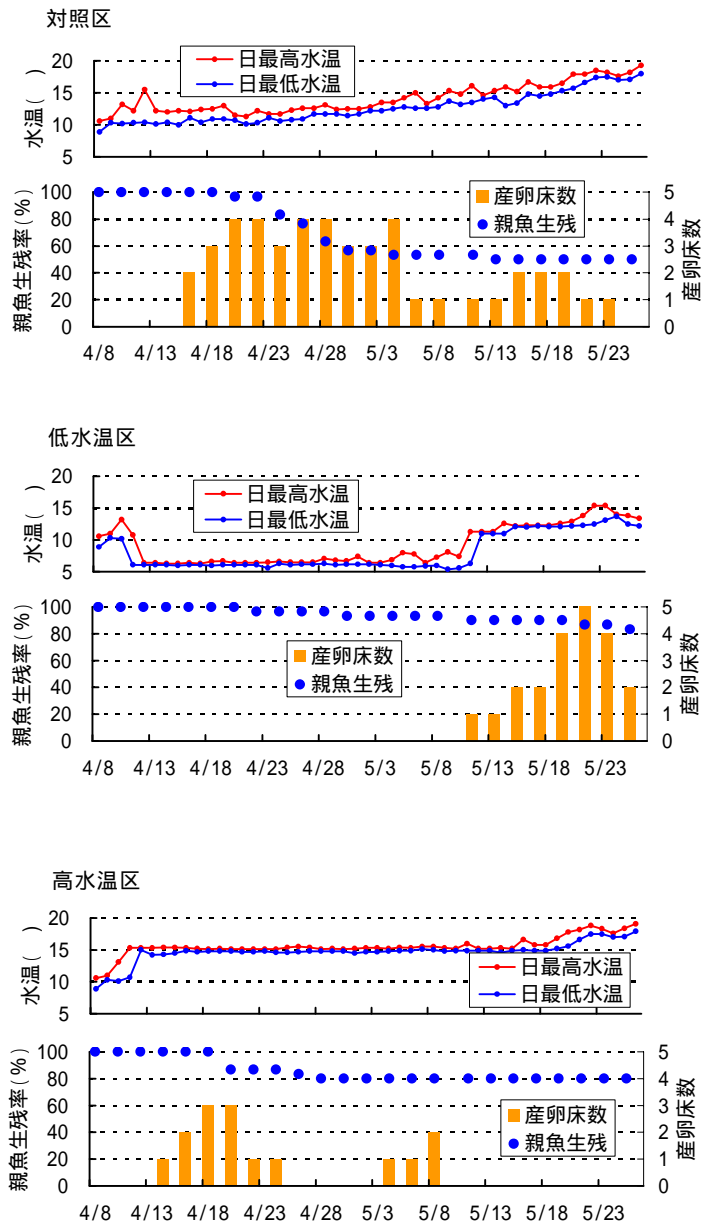


図 1 イサザ親魚を低水温、高水温および湖水温（対照）で飼育したときの、水温、産卵床数および親魚生残率の推移。